
イノセント

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イノセント

【Nコード】
N2317W

【作者名】
器用貧乏

【あらすじ】
純粹ってなんだろう。

待ち合わせの喫茶店に入って辺りを見渡すと、朝更衣室で会った時と同じ黄色のＴシャツを着た美沙の後ろ姿が見えた。横を通り過ぎる際にチラッと本人だと確認したあと、「遅くなってごめんね」と手を合わせて向かいの席につく。

美沙とは同じプラスチック製品会社のパートの同僚。特に仲が良いいというわけではないのだが、他は年配の人ばかりで年齢の近い私たちは自然と昼休みを一緒に過ごすことが多かった。

「どうしたの？」

アイスコーヒーを注文した後尋ねる。聞かなくても大体分かっているという表情はおくびにも出さず。

「今日、検査工程であの人たちと同じになったんだ。でも一言も話さないの、まあこっちも話す気なんてないけど。でもなんであいう種類の人って派閥を作りたがるのかしら。何にも得なんて無いのにね」

いわゆる愚痴だ。会社帰りに喫茶店に誘われる、ということはこういうことなのだ。いい加減うんざりするのだが、毎日顔を合わせる相手でもあるので断り切れないというのが正直なところ。愛想笑いをしている自分が嫌になる瞬間でもある。

「うーん、仕方がないのかな。よく分からないけど…」

これは本音。本当に分からないのだ、派閥を作る側の気持ちも文句を言う側の気持ちも。

「相変わらずのん気で良いわね、あなた。そんなフワフワしてるから旦那の浮気も気付かないのよ」

それとなく他人の過去をえぐりだす。俯いた私の胸の辺りがキリキリと痛んだ。

夫と別れたのは半年前、原因は前述の通り夫の浮気。証拠を突き出すと謝るところか開き直った、嫌なら別れる、と。今年３歳にな

つたばかりの一人息子翔太の親権は私がもらった。まあ元から子供に対して愛情を示していなかったあの人と親権を争うことは無いだろうし、実際にそうだった。それから今の会社で働きだし、日々を必死で暮らしている。

「元旦那からは慰謝料とか養育費とかもらっているわけ？」

「ずけずけと土足でプライベートに入り込んでくる。思い出したくない話題にさらにお金の話。憤りを飲み込むようにアイスコーヒーをガブツと一飲みした。

「いえ、何にも。もとから稼ぎなんてたいしたことなかったし、それにもう関わりあいたくないし……」

これも本音。今は何も話したくない、何も信じたくない……。

「えー、そうなの？旦那が悪いんだから、搾り取れるものは取らなきゃダメよ。全くあんたって人は、お人よしなのかピュアなのか」

ピュア？私が？

あり得ない。色んなことを嘆いてきた私が、色んなことから逃げてきた私が。

あなたは目の前にあるアイスコーヒーの透明な氷もピュアって言うのかしら？不純物が混じっている氷のことを。

あなたは目に見えない空気もピュアって言うのかしら？粉塵が混じっているこの空気のことを。

美沙が話を続けている間、様々な問答が頭を駆け巡るが口にすることは無く、力ない愛想笑いで話を乗り切った。

腕時計を見るともう翔太を迎えに行かなくてはいけない時間。残りのコーヒーを飲むとため息を吐き出すように話し出した。

「もう翔太を迎えに行かなくちゃいけない時間だから帰るね、また明日ね」

そういうと自分の代金だけ払って店を後にした。重りが両肩に乗せられたような疲れを感じ憂鬱になる。

もう一度時計を見た。翔太が待っている保育園はここから10分程度、少し急げば間に合うはずだ。自転車を漕ぐ足取りも重く、いつもはすぐ着くはずの保育園がやけに遠く感じ、高温多湿の気候がさらに気分を不快にさせた。

やっとの思いで保育園に着くと、門の前に自転車を止め翔太を迎えに行った。室内にいた翔太は保育士のお姉さんとオモチャで遊んでいたが、私が視界に入るとオモチャを放り出して近づいてきて、両手を前に出して抱っこを強要した。

すっかり重くなった翔太を勢い良く持ち上げると、さっきまで遊んでくれていたお姉さんにお礼を言い園内を出た。

翔太を自転車の後ろに乗せ、ヘルメットを被せると翔太が「ゴー！」と言つて手を挙げ出発を促す。そんな姿が可愛らしくて表情が和らいだ。翔太の勢いに乗り「じゃあ、いくよー！」と元氣良く言うのと、力強くペダルを踏み出した。翔太の体重の分、さっきより重くなっているはずなのにペダルが軽やかに動いた。そして、風を心地よく感じる事が出来た。

「今日は何したの？」

家に着き、翔太を部屋着に着替えさせながら話しかける。

「今日はねえ、お外で遊んだの。今日はねえ、土が良い匂いだったの。僕の好きな匂い」

「土？土の匂いってどんな匂い？」

意味が分からなかったので問いかけると、翔太は得意げな顔で話し出す。

「ママ知らないの？土はねえ、いろんな匂いがあるんだよ。朝と夜でも、晴れと雨でも、夏と冬とでもぜんぜん違う匂いがするんだよ。僕はねえ、雨の朝の匂いが一番好きだなあ」

笑顔で答えるその吸い込まれそうな瞳を見たら、泣き出しそうになった。いや、実際涙が溢れ出してきたので咄嗟に翔太を抱きしめ

た。

「あれっ、ママも良い匂いがするね。ママはどんな匂いが好き？」
耳元で翔太の声ができる、翔太の匂いがする。それだけで…。

「ママはね…、ママはね…」

そこから先は声にならなかった。

了
>

<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2317w/>

イノセント

2011年8月29日03時17分発行